最大限に引き出して点である。とくに、の第三部「カテゴリ超越論的演繹」は、論に関して日本語で る現代最良の注釈と いる。超越論的演 関する内外の研究文 網羅的に読み込み、 知見を取り入れていこが、このような成 して表れている。現 物自体の問題につい 本書では暫定的な が示されているが、 点に関する著者の今 研究が期待される。 はとくに哲学を志す 分々に読んでいただ い書物である。（う ・かずひこ＝法政大 学院兼任講師・近現 ツ哲学、生命・医 理学）

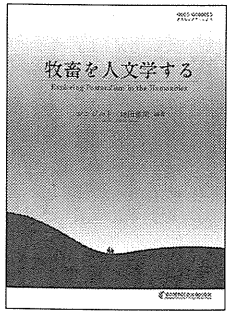
なかの・ひろたか＝ の水大学基幹研究院 ・西洋哲学。東京 大学院修士課程修 論文に「ルソーにお 限性の自我論」な 九七五年生。

学術思想

シンジルト／地田　徹朗編著
牧畜を人文学する

歴史学と人類学による牧畜論である。社会科授業で断片的に紹介される牧畜民の世界史的意義や文化的特質、難民問題や民族問題の背景にある現代世界における辺境的位置づけが分かってくる。かなり専門的内容が含まれているが、何より読み物として楽しい。

第一部「変遷」は牧畜民の世界史である。一章「ユーラシア牧畜民がリーダーに求めたものとは？」は、匈奴・チンギスハーン・ティムールらを取り上げ、そのリーダー像や統治原理に見られる属人主義的な特質を説明し、民族の枠を越えた柔軟な政治体制がなぜ現れたのかを説明する。二章「アフリカ牧畜民は帝国をどう経験したのか？」は、移動を常とする牧畜社会に国境が引かれた歴史の影響＝アフリカにおける帝国主義が牧畜民側から描かれている。三章「ロシアの牧畜民はなぜ魚も好むのか？」は、一七世紀にウラル山脈を越えてヨーロッパに移住したモンゴル系カルムィク人の知られざる歴史である。四章「ソ連はカザフに何をもたらしたのか？」は、社会主義政策による遊牧文化への影響を概観している。



A5判・254頁・2200円
名古屋外国語大学出版会
978-4-908523-29-8
TEL.0561-74-1111

歴史学と人類学による牧畜論
新たな資料に基づく瑞々しい記述

高倉浩樹

第二部「境遇」は牧畜社会と農耕民・国家との関係である。五章「ヒマラヤ牧畜民の暮らしに大切なものは何？」は、交易を軸とする農民・牧民の協力関係が描かれ、しかしそれは不平等な性質であることが指摘されている。六章「エチオピアの遊牧民はなぜ畑を耕すのか？」は、国民統合の過程で農耕化しつつも、牧畜文化を維持するボラナ社会の記述である。農耕化という意味では内モンゴル、国民統合という点ではソ連・多民族統治と比較したら面白いだろうと思った。七章「トルコの遊牧民は時代遅れか？」は、経済というよりむしろ象徴的役割を果たしている牧畜は、トルコ国民のアイデンティティ形成にも寄与しているにもかかわらず、牧畜「民」は差別される現実を描いている。八章「土地の私有化はモンゴルになぜなじまない？」は、資本主義化のなかで国際開発機関が促進した放牧地の私有化を拒否し、それに代わる制度を作り出したモンゴル国の実情が詳らかにした。

第三部「共生」は、牧畜社会に見られる倫理を扱っている。九章「シベリアでトナカイがはぐれたらどうする？」は、従来知られてこなかったトナカイ牧畜民の隣人関係の民族誌であり、資料的価値が高い。十章「チベットの牧畜民にとって親族とは何か？」は、ニェディと呼ばれる親族を基軸とした社会集団の形成が、現在生成される様を描いている。その理由は、五章や七章と同様に農耕民との不平等な関係にある。一一章「ナイル牧畜民はなぜ敵を助けるのか？」は、紛争における命乞いという社会過程を描いた圧巻の民族誌である。生き残るためには、眼前の敵に対し、身体と声に共振するコミュニケーションを作り出せるかが重要という指摘は、我々が十分に概念化できていないコミュニケーション様態が存在していることを示唆している。一二章「ユーラシア牧畜民の英雄叙事詩とは何か？」は、文字を持たなかった民族のなかで継承されてきた豊かな口承文芸の紹介である。

章の題目だけを見ていても興味がかき立てられるが、中堅から若手の研究者による新たな資料に基づく瑞々しい記述はその期待を裏切らない。新聞などで報道される国際社会を理解する上でも、牧畜というキーワードが重要な位置づけをもっていることを実感させる図書であった。あえていえばアンデス牧畜民が入っていないことが残念であった。（たかくら・ひろき＝東北大学大学院教授・文化人類学）

★シンジルト＝熊本大学大学院人文社会科学研究部教授・社会人類学・内陸アジア研究。

★ちだ・てつろう＝名古屋外国語大学世界共生学部准教授・ソ連史・中央アジア地域研究。

★かとう・きよふみ＝人間文化研究機構国文学研究資料館准教授・日本近現代史・東アジア国際関係史・アーカイブズ（歴史記録）学。早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学。著書に『満蒙開拓団　虚妄の「日満一体」』など。一九

た引揚体験の記憶化の多義性も興味深 悲名の人々の体験談 ィアでの表象など 料の歴史学的活用 国史の枠組みを超 体的かつ重層的な ア史の提示といっ

り新たな試み

に引揚体験の記憶化の多義性も興味深悲名の人々の体験談ィアでの表象など料の歴史学的活用国史の枠組みを超体的かつ重層的なア史の提示といっ

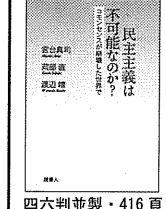
いう前期集団引揚（1946-50年）しか議論の俎上に載せていない。敗戦前に戦場となり、事実上引揚（疎開）が始まっていた南洋諸島と東南アジアも検討対象から外されている。こうした研究に出会った評者の経験からすれば納得できる部分もある。こうした戦略的な論述は引揚者問題を理解しやすくする反面、引揚者の歴史的意義とその多様性を見過ごしてしまう恐れもある。同時に歴史化作業における客観性の担保、論述方法といった課題が鮮明化されたことは確かである。

引揚は過ぎ去った歴史でも引揚者だけの問題でもない。現代の日本社会を照らし出す鏡である。21世紀に入ってから、引揚者2世らの努力によって開館された「満蒙開拓平和記念館」が国内外から国境を越えて他者と対話しつながりを築く可能性も内包されている。本書は引揚に興味をもたない人にとっても、一読の価値はある。（みなみ・まこと／りょう・せつこう＝長崎大学多文化社会学部准教授・歴史社会学・国際社会学専攻）

読書人単行本

現代の三賢人が語りつくした、「10（平成後期10年間）＋1（10年後の未来に向けて）」の全記録——世界は、社会は、人びとの心はどう変わったのか？

『民主主義は不可能なのか？
コモンセンスが崩壊した世界で』



宮台真司・苅部直・渡辺靖 著

現代社会を読み解くための、必読の書！『週刊読書人』に2009年から2018年まで掲載された「年末回顧鼎談」に、（「あとがき」にかえて）と題した語りおろし（4万字）を合わせ、鼎談11本を全収録。各頁にテーマを理解するための手引きとして詳細な註を付す（作成＝綿野恵太）。

四六判並製・416頁
本体2,400円＋税
ISBN978-4-924671-39-3

読書人　既刊『福島原発集団訴訟の判決を巡って　一民衆の視座から』前田朗、小出裕章、崎山比早子、黒澤知弘、村田弘、佐藤嘉幸著（本体1,000円＋税）

6月の新刊

楠木建氏推薦！

Ⓢ新潮社の最新刊

薬剤師